

対談 生田秀・耕一を語る — 小鼓の話 —

関屋俊彦

以下は、2004年11月30日（火）総合図書館で行われた記念講演会の記録である。当日は、午後1時から図書館職員の進行の下、田中登館長の挨拶のあと、関屋があらましを語り、生田秀昭氏との対談があった。立ち見も出るほどの盛況であったことに、まずは感謝申し上げたい。

いきさつ

前に講演させてもらいましたのは、昭和62年のことで、かれこれ17年前になります。その時は「能の世界」と題してお話ししました。本日もお見えの藤井収さんにお世話になりました。

最初に今回のいきさつや展示品などについて、私の方からあらましお話しさせていただきます。お手元に『関大図書館フォーラム』に書かさせてもらったものを配布してあります。これはどうやらインターネットからでも取り出せるようです。

関大図書館には生田文庫があります。吹田のアサヒビールの創立に関わられた生田秀氏（明治39年逝去）とその子息耕一氏（昭和8年逝去）によって収集されたもので、昭和23年に『万葉集』を中心とする約1,600冊が遺族から寄贈されました。既に『関西大学所蔵生田文庫・頼原文庫目録』として公にされています。私は関大に戻ってきて、その中で特に能楽史料に着目し「生田耕一と能楽伝書—関西大学図書館蔵本について—」と題して『かんのう』（平成2年2月号・大阪能楽観賞会）で報告しました。すなわち、耕一氏は『万葉集』研究の一方で山崎楽堂氏と『鼓筒之鑑定』（大正6年・わんや）を刊行するなど、能楽の小鼓の研究にも力を注いでいました。そして『四座役者目録』や『催華餘薫』などの丁寧な写しほか能楽伝書が多いことについて報告しました。いちおう生田家にも問い合わせの手紙を出しましたが、御返事はもらえなかったし、多分もうお宅にはなにもないのだろうと思い込んでいました。

ところが、平成14年9月3日、何気なくテレビの「なんでも鑑定団」を見ていて仰天したのです。耕一氏の孫にあたる秀昭氏が鼓筒（鼓の胴体の部分）80余丁を鑑定に出されたのです。すぐに手紙を差し上げ、16日に阪急吹田駅から徒歩10分の御自宅



で初めてお会いすることができました。その時のいきさつがつい最近の『観世』11月号に生田秀昭さんと小鼓の大倉源次郎さんの対談にも次のように書かれています。

大倉 私は、以前、関西大学に非常勤で講義に行っていたことがあり、そこで関屋俊彦先生から、生田さんのことを尋ねられたことはありました。関屋さんは、生田さんへ手紙を出されたこともあったようです。私は、『鼓筒之鑑定』は存じ上げておりましたが、ご当代がどうされているのかは知りませんでしたから、ひょっとして手放されたのと違いますかと、そこで終わってしまったのです。

生田 祖父はある時期、鼓の研究に興味を無くし、『万葉集』の研究に打ち込み、文学関係の書物もたくさん集めておりました。関西大学の金子又兵衛先生がご近所にお住まいで、同じ文学の研究ということで行き来があり、戦後すぐ、関大の図書館に本がないから貸してもらえないかということで、文学関係の図書を千五百冊お貸ししました。それが今、生田文庫として保管されています。そ

んなことで、関屋さんは、金子先生から鼓のことも聞かれていたのでしょうか。20年程前に問合せの手紙が来たのですが、当時、私も興味がなく、人に見せるのも煩わしいと、そのままにしておいたのです。

大倉 それで2年前に、TV番組に出られたのがきっかけで、それからがひと騒動というか、今回の展覧会に至ったのです。

生田 私も受け継いだものの、マンション住まいで、いつまでもこのままの状態に置いておくより博物館あたりにまとめて収められればと思い、そのきっかけにでもなればとTVへ出しました。たまたま関屋さんがそれをご覧になって、慌てて飛んで来られました。

以上ですが、鼓筒以外にも大量の蔵書があり、整理に困っていることを伺い、私はしめたと思い、鼓の方は大金なので最初からあきらめていましたが、残った蔵書については是非関大の御縁で入れてもらえないかとお願いしました。入るかどうかもまったく成算もなく、お願いしたのです。当初、立命館や早稲田大学の話もあったようです。その後、源次郎さんが奔走され、池坊短大での展示や京都観世会館での音比べが行われました。

ここで生田さんに感心しますのは、私だけでなく、つい四・五年前の生田さんは鼓には御興味がなく、大学の研究者との交流の中で、猛勉強の結果たちまち此道の第一人者になられたことです。鼓は囃子事ですから、音楽面では芸大系を中心に研究が進んでいるのですが、鼓筒そのものについての研究は、まさに耕一氏の『鼓筒之鑑定』に溯るしかありません。大正6年の時点でストップしていた。研究上の盲点だったとも言えます。

秀氏ここで生田文庫の根幹となった生田秀氏その人のことについて述べなければなりません、のちほど生田さんとの対談の中で御紹介したいと思っています。

残っている蔵書については、私的なものや秀昭氏が次第に興味を持たれた鼓筒関連のものは除き、関西大学図書館に入ることとなりました。生田家の心を動かしたのは関大には既に生田文庫があり、それらは肥田皓三氏以来、和本を丁寧に帙で保存されている方針をご覧になって安心されたことも要因のひとつでありましょう。

蔵書の整理

新蔵書は図書館の作業室に運び込み、大学院学生にも手伝ってもらい目下整理中です。ダンボール箱や紙袋大小取り混ぜて10箱以上ありました。半世紀ぶりに開かれた歴史的資料です。とりあえず厚く積もった埃などを拭うのが大変でした。軍手はすぐ真っ黒になる。虫も這い出してきました。仮目録の段階ですが、303点を数えています。解題目録作成を目指しています。単なる目録ではなく解題目録にこだわるのは、時間はかかっても近代黎明期の巨人の仕事を迎えることが大事だと思われるからです。

新蔵書で特筆すべきは『和漢朗詠集』（鎌倉時代写）2巻であり、『明末扇面書画』であります。これらについては、別に機会を改めて展示が予定されるはずです。

能楽関係のものは近世中期成立以降の冊子が圧倒的に多いのですが、写本に限れば、その性格上全て新史料ということになります。書名のないものも能楽研究の昨今の著しい進歩からすれば、もはや単に「能秘伝書」と題する訳にはいきません。細かい分類と共に仮題をつけなければならない訳ですが、これに苦心しています。それぞれ即断しかねる不明は無念ですが、今後研究するに伴って思いもかけない価値が出てくるものもあるに違いありません。

謡以外のことを書き付けた^{ふし}節付・型付・装束付などを総称して付と言いますが、この分類が大変面倒で、しかも101点と最も数が多いのです。これはどうやら耕一氏が鼓に詳しくは元より、父秀氏の能楽への並々ならぬ思いに負うところが多いようです。明治37年の「名簿」に秀氏が当時大阪市内にお住まいで、観世流シテ方の大西閑雪に謡を習っていたことがわかります。旧蔵書『催華餘薫』の名前の由来を閑雪に聞いているのもこれでよく納得できます。謡だけでなく、金春流太鼓や大倉流の小鼓を習っていたこともわかります。更に太鼓伝書の『ミちのおく』は嘉永4年の写本ですが、「秀按」と自分の考えを書き込んでいます。謡本に鼓の手付けの書き込みがしばしば見受けられるのを含め、付の類は耕一氏共々まさに舞台上で使用するための実用書として使用されたのでしょうか。自宅に茶室兼能舞台もあったと言われることをも含めて、当時の第一線の経済人が一方でいかに文化を大切にされたか、その豊かな感性を垣間見られるというものです。

展示品解説

能舞台の絵が掲げられています。あれは、こちらの館員の方が辞書を参照に描かれたものです。こういった催しは、皆さんの御協力があってからこそです。ありがとうございます。せっかくですので、以下の小鼓に関わることでもありますので少し説明します。各種あります能舞台の解説の中で、一番面白いと思ったのは、能舞台を人間の体にたとえている例です。大蔵弥太郎さんの解説に出典未詳ですが、能舞台は昔は「舞体」と書いていた。すなわち、屋根の張りは肋骨を表し、幕は心臓の弁と息吹き、四隅の柱は手足、舞台の下には人間にある九つの穴に合わせ、九つの甕が置いてある。鼓の音は心臓の鼓動、そして演者は血液、だから演技は常に流れている、とあります。「鼓の音は心臓の鼓動」だとは大倉源次郎さんもおっしゃっていて、能を見ていて眠くなるのは、心臓の脈拍ですね、丁度合っているものだから、自然と気持ちよくなるのだと。それから舞台の下の甕は音響効果のために置かれているのですが、能楽堂の舞台は、舞台そのものが能楽を演ずるといって、それだけのために造られているということです。以前、シンフォニーホールが出来て間もなくのころ、山本博通さんたちが、能楽を試みられた事がありました。休憩時間に鼓の久田舜一郎さんが側に来られて「ここは西洋音楽のために建てられているので、鼓の音が耳に鋭く響かなかったか」と問われたのにはびっくりしました。

鼓は空気中の湿気には大変敏感で、時々鼓方の方が小さい紙（調子紙）に唾液を付けて皮（馬の皮でできている）に貼ってあるのを目撃することがあります。その日の、あるいは会場の乾燥の程度に合わせて調整されている微妙な楽器なのです。

「新」生田文庫の能楽資料（抄）

1 『(観世流福王系87冊一番綴番外謡本)』

「観世流。京観世福王系謡本か」とした。謡本で上掛り・下掛りというのは、謡の文句や節がお互い近いという地域性からの由来。本来100冊揃い。

福王系と判断したのは「観世茂兵衛御改安藤御本ニテ写之也」の書き込みがあることから。神戸女子大がお持ちの福王系のものと同じです。福王というのは、脇方の名称。ちなみに今、御活躍中の中村弥三郎氏は旧姓福王で、私と関大文学科の同級生です。

番外謡本のひとつの例として、展示ではけんしゅう《剣珠》

の方を開きました。隣に《西宮》を展示してあります。《剣珠》が本来の名称で西を守る本社のの広田神社にまつわる伝承に基づきます。水晶玉中央部に傷があり、見ようによっては剣に見えます。平成2年に初演されましたが、平成13年10月20日、念願かなって広田神社で山本勝一氏まさかず（関大卒）のシテで演じられました。甥が山本章弘氏で関大能楽部の指導をされています。ちなみに関大図書館には『国書総目録』で「福王流番外謡805番本161冊 吉田幸一蔵」となっているものをバブルの時代に購入してもらっています。そのほかを合わせると番外謡本は関大図書館結構多いのです。現行曲にあきたらなくなっている今、関大本は今後益々注目されると予言しておきたいと思います。

2 『(20冊綴葉装五番綴揃謡本)』写本廿冊。

譲渡された能楽関係のもので最も古いと思われるものがこれです。表紙に「押し八双」があると、院生の恵阪悟君が発見してくれました。「筋押さえ」ともいいますが空押しの筋をヘラでつけた跡があります。「押し八双」は古活字本時代に流布していました。これによって原表紙であることがわかります。「五番綴」なので「室町時代後期」とするのはきついかたとも思われたのですが、表章氏の『鴻山文庫本の研究』によると、天正のころの「小宮山藤右衛元政本」も一番綴を五番綴に改装したとあるので、謡の文句から見ても、少なくとも室町期の面影を残す貴重な資料としていいものです。



展示で開いた部分は、本日、鼓をテーマにしているので《天鼓》の曲を開きました。

5 『玄笛流（秘伝之書）』写本一冊。

内題で「玄笛流」ととる。笛方の森田流の伝書。流祖森田庄兵衛の師が牛尾玄笛であったことによる。それよりも挿み紙があり、それには「大阪市東区安土四丁目 松雲堂鹿田静七」とある。鹿田松雲堂は老舗の古書店。生田家の昵懇にしていた店のひとつ

らしい。

7『石橋早鼓之一件』

「台徳院様御代」で始まる明らかに大蔵虎明『わらんべ草』の一節です。台徳院様すなわち二代の徳川秀忠の時に《石橋》の能を復活させたことがあった。シテの出の時、早鼓で出るとの虎明の博学が鼓方の幸小左衛門の主張を退けた。こういう伝わり方をしているという点で大事な資料です。

8『道成寺』写本一冊。

能楽の初心者にもわかりやすいものをとという要請があったので出しました。道成寺の話は恋する女の執念の物語としてよく知っているでしょう。四年に一回は必ず卒論に取り上げられるテーマです。能での見せ場は鐘入りですが、「乱拍子」といって鐘に一步一步ゆっくりと近づくシテ（主人公）に対峙して小鼓方が裂帛の気合いで応じるのがもうひとつの見せ場で、小鼓方にとっては重習いに属する大事な聞かせどころでもあります。

9『春宮風鼓』写本一冊。

中奥書「明應二年八月六日 金春弥七 在判／永正三年丙寅三月日同弥七以自筆之本写之」。秦元安・氏昭・宮増弥左衛門・暮松与三郎などの名が見える。大阪大学の天野文雄氏が最近書かれた新資料の紹介の論の中に『風鼓』は上野朝義家蔵『金春太夫秘伝書』など三点がその名をあげているに過ぎないとある。

10『大倉流小鼓一調手付』写本二冊。

① 外題「明治三十六年一月 弱法師 大倉流小鼓一調手付 生田秀」。

②「葵上 大倉流小鼓一調手付」

秀氏は、大倉流小鼓を習っていたことがこれからわかる。鼓との関わりは耕一氏以前からだったので。そのころの大倉宗家は14世繁次郎宣明（大正14年71歳没）です。小鼓一調とは小鼓演奏者一人の鼓に合わせて謡い手一人が能の一部を謡うこと。手付とは楽器演奏部分の作曲を指す。小鼓で言えば四つの音（チ・タ・プ・ポ）の打音で表されます。《葵上》の枕の段を開く。

11『大倉流一調手付』写本三冊。

生田秀の住所印が見られる。「大阪府三島郡千里村字片山番外十九番邸」。関大のすぐ近くです。

12『金春流太鼓 上』写本一冊。

外題「明治三十五年九月 金春流太鼓 上 生田秀」。秀氏は、金春流太鼓をも習っていたことがこれからしてもわかります。そのころの宗家は19世泰

三（明治36年63歳没）です。

15『(名簿并謡曲名)』写本一冊。

「(明治)三十七年十月 大西閑雪翁社中」で「東区今橋三丁目 生田秀」「京都市上京区若王寺境内川越方 生田耕一」と並んで見えるのに注意してください。秀氏は明治のころ大阪市に住み、観世流の大西閑雪に謡を習っていたことがわかります。大西閑雪（1840～1916）は《関寺小町》を二度つとめている関西の大御所でした。門人名には、そのほかに住友吉左衛門・鴻池新十郎・森田操・玉手菊洲・鹿田清七の名前が見えます。

16『秘書蘭曲十章』

明治29年大西拙斎所持のものを大正4年に耕一が書写した。「師大西閑雪大人来宅、稽古の砌」とあります。生田家には茶室兼能舞台があったということをつづけるものです。多分、ほかのお弟子さんも生田家に集まって、師匠が出向いて稽古していたものでしょう。

19『(高木半新作謡本)』活字本四冊。

高木半は大阪府三島郡福井村。高槻藩郷土。大正2年87歳で『国諷』に《桜井》を寄稿。国学的色彩が強い。高木半のものは、これ以外にも『新楽』4冊、『新能楽』2冊があり、あまり出版されていないもので、高木半関係のものを一番持っているのは関大ということになります。

20『寄生木』活字本一冊。生田耕一著。

大正13年6月1日。山中孝次郎（大阪市東区）発行。耕一氏の私歌集。自費出版。耕一さんは澤瀉久孝氏の薫陶を得、『万葉集』の難解語句の研究に専念していました。一方で、短歌の実作者であり「三水会」に所属していました。

21『生田家蔵書 鼓琴窟図書目録』写本一冊。

覆表紙に標題墨書。原稿便箋363枚。凡例に「昭和九年五月」とある。

ほかにもお話ししたいのですが、時間もありませんので、このくらいにして、次に生田さんとの対談に移ります。

対 談

1. 秀氏について

関屋 今日の問題でもあるのですが、私は最初「ひで」と読んでいたのですが、むしろ「ひいず」という読みの方がよろしいのでしょうか。

生田 いや、アサヒビールの方では「ひいず」と読んでいるようなのですが、私の家族では、そのよう



な言い方はしておりません。ほとんど「ひで」もしくは「ひでさん」という言い方をしております。もともとの名前が「日出蔵」で、これは日が出るという意味で、「日出」すなわち「ひで」と呼んだのではないかと思われま。基本的には「ひで」でよいかと思ひます。

関屋 今、伺ってみましたのは、いただいた資料『佐渡の百年』(山本修之助著・同刊行会・昭和47年)に「秀は安政3年1月1日に生まれ、初日の出に因んで日出之助と名づけたが、後年日出を秀と改めた」とあったからです。この話の方が面白そうですね。

生田 生年月日につきましては、没年は同じなのですが、『佐渡の百年』やアサヒビールの社史『Asahi100』を始めとして色々説がわかれているようです。私どもの家では位牌などを重んじて、安政4年10月11日としております。

関屋 わかりました。なくなられたのは、明治39年3月28日で51歳ということになりますか。

生田 そうです。当時は数え年ですので、満年齢でいいますと49歳ということになります。

関屋 次に、佐渡島御出身で代々漢法医だったのですか。

生田 そうですね。秀さんも家業を受け継ぐために当時の最先端であったドイツ医学を学ぶために、まずドイツ語を学んだものではないかと推測しています。結局、医者にはならず当時の内務省の横浜衛生試験所の技官になっていく訳です。

関屋 その後、『佐渡百年』では、明治20年にアサヒビール(当時、大阪麦酒株式会社)が創立される訳ですが、21年に技師として入社し、すぐ4月にドイツに留学され、帰国後、支配人にまでなられたということですね。なお、『Asahi100』では、同じ佐渡島出身で、のちに東大医学部教授になる蘭法医で

語学の天才・司馬凌海との関わりが若きころの姿として書かれています。さて、ドイツに派遣された訳ですが、今回は見送らせてもらいましたが、確かに火薬に関わるノートも保存されていたようですね。

生田 火薬や砲弾、艦砲射撃に関わるものが、明治7年から13年にかけてドイツ語から翻訳したものが残っています。日露戦争(1904~5)を控えた当時の状況があったようで、バルチック艦隊を迎え討つ作戦の下敷きのようなものなど、本来の目的以外の翻訳の仕事もあったのかなと思っています。

関屋 それでは、アサヒビールとの関わりのお話に移ります。ちなみに三女の光子さんは当時工場長だった高橋竜太郎氏に嫁ぎますが、竜太郎氏は社長にまでなり、戦後、通産大臣になった方でもあります。さて、素朴な疑問なのですが、なぜ、吹田にアサヒビールだったのでしょうか。私が初めて大阪に来て、近くに下宿した時、なんて大阪の水はまずいだろうと思ったものですが、当時は、おいしかったのでしょうかね。

生田 アサヒビールが吹田に工場を作った一番の原因は、当時、流通ルートが確立されている訳ではありませんので、最大の消費地である大阪に近いし、京都・神戸の中間に位置しているという配送面から考えての立地条件に恵まれていたということが、まず考えられますね。それに、鉄道に隣接している、線路が敷設されて工場の近くには吹田駅がありますね。それから水質面では、近くに泉殿神社というのがあります。私が小さいころはこんこんと湧き出していたのを覚えています。豊富な地下水があるということです。しかも、あの辺りは砂地にして、良質の軟水が得られたのです。そうしたことが大きかったと思われる。

関屋 なるほど、よく理解できました。次に、アサヒビール資料室の調査では秀さんの専門であるビールに関わる著述は10点ほどを数えていますが、それ以外わかりますでしょうか。

生田 曾祖父秀の書いたのは、著述というよりか、記録とか役人時代の翻訳ということになりますね。アサヒビールが社史『Asahi100』を作成した時、私どもから寄贈させてもらったものですので、それ以外はといわれるとよくわかりません。家では先ほど申しましたように、ドイツ語の翻訳などの原稿を一部残しております。

関屋 次に『展覧目録』『名簿』に大西閑雪社中として「東区今橋三丁目」、『大倉流一調手付』には

「大阪府三島郡千里村字片山番外十九番邸」の住所印があります。当初は東区に住んでいたと解釈してよろしいのでしょうか。

生田 東区は多分、当時アサヒビール本社の大阪事務室が東区にあった関係から事務室の住所ではないかと思っています。千里山の方は、現在の吹田工場の北側にあります迎賓館の場所でありまして、社宅のあった場所に当たります。生活が落ち着いてから今の場所に移り住んだと思われま

関屋 今、おっしゃっていただきました迎賓館には割と自由に出入りできまして、緑生い茂る素晴らしいところですよ。そして、迎賓館に至る道を「先人の小道」と名付けて、そこに秀さんの胸像が建っています。是非、一度訪れてみてください。さて、次に『目録』『秘書蘭曲十章』に、これは耕一氏30歳のころの奥書ですが「大西閑雪大人来宅稽古の砌」とあります。御自宅には茶室兼能舞台もあったということですが、それについては、いかがでしょうか。

生田 子供のころ、藁葺きの屋根で池に面して別棟としてあったのを覚えています。第二室戸台風の時だったでしょうかに屋根が吹き飛ばされ、その時点で取り壊してしまいました。床下に音響効果としての甕が五つほど置いてあったのを覚えています。

II. 耕一氏について

関屋 次に耕一さんの話に移りたいと思います。先ほど紹介した名簿に秀さんと耕一さん二人の名前が見られます。耕一さんは、父親である秀さんと共に大西閑雪に稽古をつけてもらったということになるようですね。

生田 秀さんの晩年のころ一緒にやっていたものでしょう。

関屋 父の影響は大きかったのでしょうか。ところで、一方で『万葉集』の難語解釈に没頭され、澤渦久孝氏など当時の錚錚たる学者と交流があったようですが、そこらあたりはいかがでしょう。

生田 私自身は祖父耕一がなくなってから生まれたものですから、残念ながら記憶にはありません。

関屋 ああ、そうでしたね。短歌の実作も心がけられ「三水会」の一員でもあったのですが、ロマンチストだったようですね。

生田 『獨飛藻』という短歌をまとめたものが、まだ手元にあります。それなどを読みましても、情熱家といますか、直截的な表現の歌を詠んでいます。

関屋 次に山崎楽堂と『鼓筒之鑑定』を著していま

す。雑誌『能楽』に、なくなられた時、小田原の鼓塚に本と共に埋められたと出ていますが、鼓塚の行方についてはいかがですか。

生田 鼓塚については今のところ残念ながらわかりません。小田原は、一時期本宅を移したところでもあります。例の大正大震災で壊滅してしまいました。それを機会に元の吹田に戻ったということです。鼓そのものも私がトランクを明ける70年間そのままにしてしまったのです。

関屋 なんとか鼓塚の所在を明らかにしたいですね。さて、鼓筒そのものの研究では、秀昭さんがもはや第一人者になられた訳ですが、今振り返ってみて『鼓筒之鑑定』についての秀昭さん自らの評価はいかがでしょう。

生田 鼓筒の研究については、あとにも先にも『鼓筒之鑑定』以外にまったく見られませんので、当時の参考書としては立派なものだと思っています。ただ、その後、私自らが研究をしてみて、私は同書で扱われている以外の資料を入手することもできました。少し専門的になりますが、鼓の上では有名な作者の折枝系統の所属がどこの家系になるかの基本的な認識の差が、山崎さんと祖父の認識は必ずしも同じではないのですが、二人の見解とは異なる見解を持てるようになってきたのです。あとにも先にもない本ということで評価しております。

関屋 生田さんの方法は、もう研究者の域といえますか、伝承を膨らませる誘惑を断ち切られて、資料については極めて慎重な態度をとっていらっしゃいます。ちなみに最近『鼓筒之鑑定』を古書のインターネットで見ましたら、30万円という値段がついていて、大変びっくりしました。

生田 私の聞いた話では、やはりインターネットで12万円を買ったということですが、30万円とは驚きですね。(笑)

関屋 次に、やはり金子又兵衛先生の思い出に移りたいと思います。

生田 金子先生は、私どもの家の北側歩いて1分もかからないところにお住まいでした。祖父とは文学の研究者仲間ということで、しょっちゅう行き来があったようです。戦後、蔵書は請われて関大さんに寄贈されることになりました。金子先生は『万葉集』を中心としたもの以外は要求されなかったようですが、『催華餘薫』や『四座役者目録』の写本類は、その中に紛れ込んでいたものでしょう。

関屋 金子先生は近世文学特に俳諧研究で著名な方

ですが、まことに粋な方で、いつも和服を召されていました。ある日の授業に30分以上経って酔ってこられてアサヒビールのお話をされていたことを思い出します。こんな話もつながっていた訳ですね。

Ⅲ. 小鼓について

関屋 いよいよ鼓の話に移らさせてもらいたいと思います。「なんでも鑑定団」に出演しようと思われたきっかけはどうだったのですか。

生田 私自身も父も鼓に関してはまったく興味がなかったのです。仕事をやめた後、整理するつもりでトランクを明けてみて70年ぶりに鼓を見た訳です。これを持っていても宝の持ち腐れだし、どこか博物館など公的な機関に入れてみようと思って、何らかの反響があるだろうことを期待して「なんでも鑑定団」に応募しました。テレビで実際に打っていただいた邦楽の望月多左衛門さんは東京芸大の卒論で『鼓筒之鑑定』を使われていたのですが、散逸したと思っていたものが目の前に現れ大変びっくりしておられました。散逸することを心配され、鼓方の大倉源次郎さん、山崎楽堂さんの息子さんの有一郎さん、早稲田大学の竹本幹夫さんが来られました。横浜能楽堂で展示をすることを前提に早稲田大学で研究会が始まり、私も一度は、すべてお預けしたのですが、なかなか進まないものですから、これなら自分一人でやってみようと思いついた訳です。

関屋 今、お話の中にありましたように、鼓は能楽で使われるだけでなく、近世邦楽や聞くところによると天理教などでも使われているということです。

生田 天理教では日常的に使われていますし、それ以外にも千葉の佐原囃子などのように祭りで使われるなど多様な使われ方がされていますね。

関屋 ここで少し鼓について少しお話し願えますでしょうか。

生田 (展示に使用した練習用の合成皮の鼓を手に入れ) 鼓は、皆様方通常、今こうしてセットされていますものを想像されるのですが、一体のものではなくばらばらになります。皮と筒(どう)を調べ緒といわれる麻紐で締めることにより楽器となります。皮は本来馬の皮を使います。当歳馬あるいは腹子といわれる胎児の皮を使うのですが、現在は手に入りにくいので、二・三歳のものを使っているようです。皮は大事に使えば百年やそこらは持つといわれています。新しい皮はよい音が出ない、プロの方は何十年も使いこんでよい音が出る皮を使われています。さて、筒の方ですが、一見すると同じよう

に見えますが、手で彫っていますので一本ずつ皆違います。内部は中空になっていて、内部の削り方によって、音が微妙に違ってきます。室町時代のころの古いものあるいは能楽大成以前の猿楽といわれていた時代のものは、主に一般大衆を前にした屋外での演奏が中心になっていますので、大きな音が出る、遠くまで音が届くという必要性があって、いわゆる遠音とおねが効くというか大音おおねが出るという作りの内部の構造になっています。それが江戸時代になってくると、歌舞伎も含めまして屋内で演奏されることが中心になってきますので、そのような必要性はなくなってきます。そのため響きがよく、華やかで、耳にやさしい音が時代時代によって工夫されていきました。その典型的な例として元禄時代に弥助道本という有名な作者がいるのですが、その筒が現在も一番よいということで、特にプロの打ち手の方に珍重されています。

関屋 展示にも使わせてもらいましたが、今のお話も含めて、生田さんもお書きになられている『小鼓 心に響く音と技の世界』(発行 大倉源次郎)は、現在の最高水準の小鼓入門書ともなっています。御希望の方があれば生田さんの方に注文してよろしいでしょうか。

生田 今、手元に三十冊ほどありますので、どうぞ。

関屋 ところで、生田さんは、お花に大変詳しいのです。会も作っていらっしゃるって日本全国は言うに及ばず、この夏も幻の花を求められて中国にいらっしゃったとか伺っています。実は、鼓の筒には花の絵が描かれる場合が多いのです。御趣味の花と筒に施された花のデザインとの関わりをお話しいただけませんでしょうか。

生田 展示用の鼓は、烏筒と言って真っ黒けで、何も描かれていないのですが、大部分の鼓には蒔絵と言って漆で絵が描かれているのですが、その中、七割から八割は花の絵が描かれています。私が最近特に興味を引かれたのは、数は少ないのですが一般に撫子せんのうと言われている絵が、実はそうではない。それは仙翁せんおうと言われているものではないかと思っています。私自身は仙翁すなわち室町時代から江戸時代初期に貴族の世界で非常に流行した嵯峨仙翁の花だと考えているのです。なんとか本物を見つけたのですが、あまりに高価なので手には入れていません。それがきっかけになり、鼓以外に能装束・屏風・絵画・刀の鏝などにもいわゆる撫子紋と言われているものがあるのを調べてみたのですが、それらの多く

は撫子ではなく、仙翁であるとわかってきました。それから、鼓に描かれた蒔絵の題材は、多く能楽の演目に由来するものがたくさんあるように思われます。研究したい方があれば、資料は私の手元にありますので、一緒に研究してみたいと思っています。関屋 貴重な小鼓の筒です。大倉源次郎さんたちと意見は一致しているのですが、貴重な鼓が分散されることなく、また単に博物館で飾られるのではなく、実際の舞台上で使用したいとの希望があります。保存は大変だと思いますが、是非ともその点よろしくお願ひ申し上げます。最後に、生田さん自らによって新しく『鼓筒之鑑定』が書かれると思います。その思いを述べていただきたく思います。

生田 鼓に関しては祖父なり山崎さんが書かれたものが唯一のもので、現在のものに合致したものにしたい、たとえば大正時代の本ですので、ほとんど写真は使われていません。修正しながら内容を新たに書き替え、外部の蒔絵だけでなく内部の削り方は作者によって特色がありますので、そういうものを含めて視覚的なものを改定版として出したいと思っています。

まとめ

戦後、多くの私立大学がそうであったように、貧弱な図書館の蔵書収集には関係者による相当の腐心がありました。関西大学図書館と大学のある吹田市の名家生田家との関わりもその例に漏れません。図書館に何もなかった時代、金子又兵衛先生の仲介で生田家の本が入ったのです。私事ながら学生時代、当時まだ円型図書館の時、生田文庫の基本図書をそうとは知らずに利用させてもらっていたことになりました。こうして残りの本も関係者の応援を得て図書館に入りました。素晴らしい資料を得た上は、その全貌を明らかにするのが今後の私たちの役目です。そして、関西大学とアサヒビールを含めた生田家両者の絆をより深めて将来へのバトンタッチをしてもらいたいのが切なる願ひです。本日は、どうもありがとうございました。(拍手)

時間の都合で話せなかったものを以下に記す。

〔展示解説〕

3 『宝永三年蒔子部分謡本（曲舞集）』写本一冊。

見返しには美しい絵が描かれている。謡本が一方で美的鑑賞のために使用されていた例として出した。

4 『舞台の図』写本一冊。

「松風」と「井筒」のところを開いた。下間少進(1551-1616)は本願寺坊官で素人役者。本願寺(当時、大阪城)には自前の能役者を養成する機関があった。『童舞抄』『叢伝抄』『舞台之図』と一揃い。

6 『袖下』写本一冊。

大永元年四月十八日に秦宗智が暮松与三郎に相伝したものを天文十八年八月九日に写した由の奥書がある。

13 『関寺伝授』写一卷。

「享保七壬寅年三月十四日 葛野九郎兵衛政賀(花押) 藤宮七兵衛殿。「五代目藤宮七兵衛忠明関寺伝授之時四十四歳也」。葛野流は大鼓方。装飾的な技法が多いことで知られる。政賀は四世(寛延三年68歳没)にあたる。冒頭の金地の部分を開いて展示。

17 『間之本』写本四冊。

大蔵流。朱書でアイの出囃子や扮装、持ち物に関する書き入れがある。

22 書簡 二通。

耕一氏は『万葉集』に関する論文や本を出した時、各方面に寄贈している。その返書は丁寧に裏打ちされていた。

① 学習院大学教授の荒木寅三郎からの礼状。「御秘蔵之能道具能書ヲ安田氏へ御譲り被相成ル由」と見える。大正大震災後、安田氏へ能楽関係のものを耕一氏が譲ったというのである。

② 「名物小鼓大観」を発行しようとした能楽書院からの案内状。同社との関わりが伺われる。

付記

その後、オプションとして別室で「生田氏を囲んで、もっと鼓を知る会」の催しを、参加者に鼓の体験をしてもらうことを交えながら行なった。

新生田文庫を入れるに際し、御助力いただいた大西昭男氏が逝去された。慎んでご冥福を祈りたい。
(せきや としひこ 文学部教授)

この対談は、平成16年度の秋季特別展「新生田文庫の能楽資料」にちなみ、記念講演会として開催したものである。
